

# 否定型応答要求表現に対する応答の揺れについて

揚 妻 祐 樹

## Ⅰ はじめに—本稿の論点と対象—

### 1、日英のちがいについて

否定疑問文の応答の仕方について、日本語と英語とが異なっていることはよく知られている。手元の英文法の学習参考書（注1）では「疑問文が肯定形であろうと否定形であろうと、疑問文の動詞が示す行為を行なうときは Yes, 行なわないときには No を用いることに注意。」とあり、否定疑問文の応答の例として以下のものを挙げている。

① Didn't you do the sights of Kyoto? (京都は見物しなかったのですか)

Yes, I did. (いいえ、見物しました)

No I didn't. (はい、見物しませんでした)

例として挙げられている英文とそれに対する和訳とでは、Yes, No、「ハイ類」(ウン、エエなどほかの肯定の応答も含む)・「イイエ類」(イヤなどほかの否定の応答も含む)が反対になっており、日本語を母語とする英語学習者の躓きの石にならぬよう注記されているわけである。

### 2. 否定疑問文の原理

しかし、否定型でも誘いや促しの文の場合、「ハイ類+肯定」「イイエ類+否定」となり、英語と同じになる。

② お昼、行きませんか？

はい、行きます。

いいえ、行きません。

③ Don't you go for lunch?

Yes, I do.]

No. I don't.

否定疑問文にすると誘いや促しのニュアンスが生じるのはなぜだろうか？ 逆に言えば、肯定疑問文「○○に行きますか？」の場合は誘いや促しのニュアンスが生じるのはなぜだろうか？

一般的に、特に何のコンテキストもなくある表現をする場合（平叙文であれ疑問文であれ）、その概念の存在について述べられるものであろう。それに対して否定文の場合、その概念の存在があらかじめ想定されており、そのコンテキストを踏まえて述べられるのである。

④テーブルの上にリングが置いてある。

⑤テーブルの上にリングが置いてない。

④は単純に現象を描写した文であるが、⑤はあるはずのリングについて述べた文である。これは疑問文についても同様で、

⑥テーブルの上に何か置いてありますか？

⑦テーブルの上に何か置いてありませんか？

⑥は知覚した現象についての単純な確認の文であるが、⑦は、やはり、テーブルの上に何か置いてあるはずだというコンテキストを踏まえて述べる文である。

疑問文のうち、相手のこれからの意志について聞く文について考えると、

⑧ご飯に行きますか？

⑨ご飯に行きませんか？

⑧は単純に相手の意志の確認の文であるが、⑨は、これからあなたのご飯に行くはずだ、という前提を踏まえて発話している文である。⑥では本当は現実的にそのような前提があって発話しているわけではなく、そのような修辭的身振りをしているのである。＜あなたはご飯に行くはずだ＞という修辭的身振りによって、それを確認する文（疑問文）に＜ご飯に行きましょう＞という意味が生じるものと思われる。⑥はもはや修辭疑問文であり、文類型的には誘いの文（働きかけの文）となっているために、その応答の仕方は次のようになるだろう。

⑨ ‘ご飯に行きませんか？ → はい、行きます。／いいえ、行きません。

### 3. 本稿で論じる問題

しかし、修辭的な否定疑問文（誘い・促し）はひとまず措くとしても、否定疑問文について解決すべき問題は他にもある。

#### （1）文型の問題

日本語における否定疑問文に対する応答は、相手の「肯定への想定」に対して yes, no を表明するといわれる（この先行研究については後述する）。しかしそうすると、肯定概念を表明する時に yes、否定概念を表明する時に no を発することになり、見かけ上英語と同じになるはずである。ところが①の場合これが逆転するのはなぜだろうか？ ⑦⑨の質問形式が「ませんか」となっているが、①の質問形式が「なかったのですか」となっており、この文型の違いが、応答のちがいに反映しているのではないか？

#### （2）「肯定への想定」という仮説の検討

果たして「肯定への想定」に対して応答するというのは、あらゆる否定疑問文に対して通用する考え方であろうか？

⑩添乗員「みなさん、忘れ物はありませんか」

客 「はい、ありません／いいえ、あります」

⑩の場合、むしろ質問者（添乗員）が否定概念を期待して質問しているように思われるし、応答者（客）がそれに応じた応答をするのが自然であるように思われる。

### （３）英語的応答

筆者の印象では、日本人が相手の想定に対して答えるのではなく、英語的応答（yes＋肯定概念、no＋否定概念）をしているように感じられる場合がある。これはどの程度の広がりがあるのだろうか？

本稿では以上のような疑問に対して筆者なりの結論を出す事を目標とする。なお本稿の考察対象を「否定型疑問文」ではなく、「否定型応答要求表現」とするのは、否定型疑問文の形式を取りながら実質的には誘いを表す文（例：ごはんに行きませんか？）や、疑問というよりも念押しをする文（例：お前、部活辞めないよな？）をも含めて考察をするからである。

## Ⅱ 否定型応答要求表現の文型の整理

### １．命題Pに対する「傾き」の蓋然性

否定型応答要求表現について、肯定命題への「傾き bias」が認められるということについては過去に多くの議論がある（注 2）。この点については既に定説化しているといえるし、筆者もその前提を共有する。たとえば「寒くないですか」という問いかけが、きっと相手は寒いはずだ、という想定・見込み（「傾き」）を前提にした問いかけである。筆者も特に～ナイカ型の否定型応答要求表現については全般的にこの「傾き」が認められると理解する。

もっともこのような「傾き」のない、中立的な否定疑問文もあり得る。井上優 1994 は、

⑪この餃子、おいしくないですか（＝まずいですか）

という例を挙げつつ、これを「分析的」用法と名づけている（逆に「傾き」のある用法が「非分析的」用法とされる）。中立的な否定疑問文の場合、否定命題（例：おいしくない）そのものが、肯定型疑問文の問うべき命題（例：まずい）と同等の立場に立つことになる。この場合、応答者が餃子をおいしいと思ったならば「いえ、おいしいです」、おいしくないと思ったら「はい、おいしくないです」という応答になるだろう。

現実的には「傾き」の有無の判定が微妙な例も多いが、ひとまず理論上この両者を切り分けておくことは、用例を解釈するうえで必要な措置であろう。そして本稿で扱う対象は非分析的な否定型応答要求表現である。

そして、この「傾き」をもつ否定型応答要求表現が用法的・文型的に特化したものが、誘いの文や禁止の文であろう。

⑫ご飯に行きませんか。(誘い)

この文は「ご飯に行く(べきである)」という命題への「傾き」がある上に、それがこれからなされる動作であること、主語が聞き手、聞き手とを含めた私たち(WE)であると解されることから誘いの意味になる。

⑬こら、止めないか。(禁止)

これは、「止める(べきである)」という肯定命題への「傾き」がある上に、「止める(べき)」主語が聞き手であり、さらに聞き手がそれを理解していない状況で発せられた時に禁止の意味になる。

このような派生的意味を理解するうえでも「傾き」の概念は否定型応答要求表現を解釈するうえで必須の要素と考えられる。しかし、この「傾き」については、いくつかの条件や限定を付けなければならないと思われる。

⑭さっき、ここにいた者なんですけど、赤い毛糸の帽子、ありませんでしたか？

この文は、明らかに「帽子がある(はずだ)」という「傾き」に基づいて発せられる。しかし次の文はどうだろう？

⑮添乗員→客「みなさん、忘れ物はありませんか？」

この文の場合、実際的には忘れ物がないことの確認の文である。もちろん忘れ物が万が一あるかもしれない、という懸念があるのだから肯定命題「忘れ物がある」ことへの「傾き」がないわけではない。しかしその文が発せられる現実的状況(に対する質問者の認識、に対する応答者の付度)との関係から、肯定命題P(例：帽子がある、忘れ物がある)に対する応答者の蓋然性への理解が異なってくる。⑭⑮いずれも肯定命題への「傾き」はあるとしても、その蓋然性が⑭は高く、⑮は低いと解されるわけである。そのため、その応答の仕方は、

⑭'「さっき、ここにいた者なんですけど、ここに赤い毛糸の帽子、ありませんでしたか？」

「はい、ありましたよ。／いいえ、ありませんでしたよ。」

⑮' 添乗員「みなさん、忘れ物はありませんか？」

客 「はい、ありません。／いいえ、ありまーす！」

という形になるのが自然だと筆者には感じられる（のちにこの点も含めアンケート結果を確認する）。否定型応答要求表現が肯定を想定しているのか、否定を想定しているのかは、発せられるシチュエーションによって（つまり文型以外のファクターによって）左右されるであろう。

## 2. ～ナイノカ

一方、文型が文の解釈を規定する場合がある。準体助詞ノが入った形は準体助詞を含まない～ナイカとは異なる「傾き」のありようを呈する。準体助詞ノを含む形式は、ノダと同様の分析が可能であろう。ノダ文は、

⑧ だいぶ曇って来たな。雨が降るんだな。

のように、既定の状況認識を踏まえたうえで、それに対する判断を行なうというのが基本的意味と解される（注3）。これを～ナイノカに当てはめると以下のような理解になると思われる。

⑨ ご飯、行かないか？

⑩ ご飯、行かないのか？

⑨は、例えばもう昼の12時を回ったからなど、質問者が主体的に理由付けした命題P「ご飯に行く（べきである）」に対する「傾き」に基づく表現である。一方⑩の場合、「ご飯に行く（べきである）」という「傾き」に加えて、それに反する既存の状況（例：昼の12時を回っているのに、相手はまだまだ仕事を中断しそうな、等）を踏まえて発話しているのである。したがって、これに対する応答の仕方は複雑である。もしも、質問者への「傾き」（質問者がそうあるべきと考える肯定的概念）を配慮して答えるならば、

⑩' 「ご飯、行かないのか」

「うん、行くよ／いや、行かない」

となるだろうし、質問者の状況把握に応じて応答するならば、

⑩'' 「ご飯、行かないのか」

「うん、行かない。／いや、行くよ」

となるだろう。先に挙げた英文法の参考書の和訳の文もまた、「京都は見物しなかつ

たのですか」のように～ナイノカ型になっている。それに対して「yes＋肯定文／no＋否定文」となっているのは、質問者の「状況把握」に対して応答をしているのである。

### 3. ～ナイネ、～ナイヨネ

久野暉 1973 は「「ネ」で終わる否定疑問は、否定の答えを予想した質問である」としている。

⑪ A：勉強シテ来マセンデシタネ。

B：ハイ。(して来ませんでした)

イイエ。(して来ました) (例文は久野暉 1973 より)

⑪のような「命題＋ネ」型の文は文型的に単純な疑問文ではなく相手に念押しをする文であり、命題の部分に対して質問者の「傾き」が認められる文である。その命題が否定命題(非P)であれば非Pに対する「傾き」が認められるのは当然であろう。もしも⑪'のような答え方をするならば、それは完全に英語的発想(肯定概念に対しては yes、否定概念に対しては no)による応答であり、日本語としては一般的ではないと思われる(注4)。

⑪' A：勉強シテ来マセンデシタネ。

B：イイエ、して来ませんでした

ハイ、して来ました。

同様のことは「～ヨネ」についても言える。

⑫ A：おまえ、部活、辞めないよね？

B：ウン。(辞めないよ)

イヤ。(実は辞めるんだ)

しかし、⑫の場合、逆の応答「ハイ類＋肯定命題／イイエ類＋否定命題」の含みが生じないだろうか？

⑫' A：おまえ、部活、辞めないよね？

B：ウン。(実は辞めるんだ)

イヤ。(辞めないよ)

この差は「～ネ」と「～ヨネ」の意味の差に由来すると考えられる。「～ネ」は、話し手が自ら判断した事柄について相手に同意を求める表現であるのに対して、「～ヨネ」は判断自体を聞き手にゆだねる表現である。これはたとえば「まさか」などの副詞と共に起るか否かによってテストすることができる。「まさか＋命題」は、自分と



たちに与えられる、ということであって、その所与のない状態とは、あくまで所与があるべきであるという前提にたった認識である。我々の認識作用は、事物の「有」を問うのが自然であり、事物の「無」を問うのは二次的である。この事情は肯定疑問文（例：帰るのか？）と否定疑問文（例：帰らないのか？）を理解する時にも妥当する。肯定疑問文の場合事物の「有」を問う疑問文であるから問い方としては自然である。そこでその応答もまた、事物の「有」の場合に「ハイ類」、事物の「無」の場合に「イエエ類」で応答する、すなわち事物の有無という単純な基準にのっとった応答の仕方になる。一方、否定疑問文の場合は、単純に事物の有無を問うものではなく、本来それがあるべきとする、文脈上の前提がある。これは単に日本語のみならず、英語においても同様である。

- ⑭ a Do you know him?  
b Don't you know him?

aの場合単純な疑問文であるが、bはあなたが本来彼を知っているべき、という文脈が生じている。規範的な英語の場合、応答の仕方については、あくまで事実として、事物の有無に対する応答になるが、日本語の場合は、この前提を踏まえたうえでの応答になるために、～ノカ類における肯定命題に対する応答になったり、応答の仕方について揺れが生じたりするということになるのであろう。

#### IV 応答表現の揺れについて

##### 1. yes と no

既に見た通り、～ノカ、～ヨネ型の文については応答表現について揺れが生じ得るものであった。またもしも日本語が英語型の表現に移行しているのであれば、典型的な日本語の応答表現とは異なる応答表現が現れる可能性もある。この点について、以下のようなアンケートを行った。アンケート時期は2019年4月で、調査対象は、藤女子大学学生76名、北海道教育大学札幌校学生51名、計127名である。

調査はyes / noの応答表現を含む形式についてのものと、首振り表現を含むものとに分けて質問した。yes / noを含む調査項目については以下のとおりである。

1. A「何か食べる？ お腹すいていない？」  
B「(うん／いや) すいている。食べる」
2. A「何か食べる？ お腹空いていない？」  
B「(うん／いや) すいていない。大丈夫」
3. 添乗員「皆さん、出発します。忘れ物はありませんか？」  
客「(はい／いいえ) ありません」
4. 添乗員「皆さん、出発します。忘れ物はありませんか？」  
客「(はい／いいえ) ありまーす」
5. A「もう8時だけど、まだ帰らないの？」



- B 「(うん／いや) まだ、仕事が残っているんだ」
6. A 「もう 8 時だけど、まだ帰らないの？」  
B 「(うん／いや) そろそろ帰るよ」
7. A 「今日は、さほど寒くないね」  
B 「(うん／いや) 昨日よりはあったかい」
8. A 「今日は、さほど寒くないね」  
B 「(うん／いや) 結構寒いよ」
9. A 「大丈夫か？ まさかとは思うんだけど……、バスケ部、辞めないよな？」  
B 「(うん／いや) 辞めないよ」
10. A 「大丈夫か？ まさかとは思うんだけど……、バスケ部、辞めないよな？」  
B (うん／いや) 辞めようと思うんだ、実は」

表 1 否定型応答要求表現に対する応答の仕方 (yes / no)

No.	主説の概念	yes	no	両方	使用せず	無回答
1	肯定	112	5	7		3
		88.19%	3.94%	5.51%		2.36%
2	否定	10	106	11		
		7.87%	83.46%	8.66%		
3	否定	121	6			
		95.28%	4.72%			
4	肯定	45	78	3	1	
		35.43%	61.42%	2.36%	0.79%	
5	否定	89	23	15		
		70.08%	18.11%	11.81%		
6	肯定	4	116	7		
		3.15%	91.34%	5.51%		
7	否定	117	6	4		
		92.13%	4.72%	3.15%		
8	肯定	1	126			
		0.79%	99.21%			
9	否定	89	26	12		
		70.08%	20.47%	9.45%		
10	肯定	9	110	7	1	
		7.09%	86.61%	5.51%	0.79%	

調査項目については、以下のように整理することができる。

pattern A：質問者が肯定の答えを期待するもの：1、2

pattern B：質問者が否定の答えを期待するもの：3、4（注5）

pattern C：～ネ：7、8

pattern D：～ヨネ：9、10

pattern E：～ナイノカ：5、6

そして、調査結果は次のように整理できる。

pattern A：「yes＋肯定概念／no＋否定概念」が多い。1、2は「誘い」の文であり肯定への「傾き」の強い例である。

pattern B：「yes＋否定概念／no＋肯定概念」が多い。

ただ、4については、「yes＋肯定概念」のパターンの割合が30%を超えている。この場合の「はい」は、yesの意味というよりも、添乗員に忘れ物をしている人間がいることについて気付いてほしいという、アピールの意味が強い可能性があるだろう。

pattern C：「yes＋否定概念」「no＋肯定概念」となっている。先に見たように～ネは同意要求であり、その上接概念が否定概念の場合、否定概念に同意を求める文になる。応答はそれに応じたものになる。

pattern D：「yes＋否定概念／no＋肯定概念」というパターンが多い。ただし、特に9に関してはばらつきも大きい。インフォーマントの一人から、9、10について「辞めるのを心配しているのと、辞めさせない恫喝とでは応答の仕方が異なる」という意見があった。辞めないことへの期待に応じる場合は、「yes＋否定概念／no＋肯定概念」となり、辞めるのではないかという疑念を払拭しようする場合、「yes＋肯定概念／no＋否定概念」となるのであろう（注6）。

pattern E：「yes＋否定概念／no＋肯定概念」が多い。この応答を見ると、肯定への「傾き」（かるのが当然だ、という質問者の想定）よりも、それに反する状況把握（それなのに、君は帰ろうとしない）に対する応答の傾向が強いことがわかる。英語の教材で日本語と英語と否定疑問文に対する応答の仕方が反転するということが紹介されるのはこのパターンである。

## 2. 首振り

次に「首振り」についての調査の報告をする。調査項目はyes／noを含む形式についての項目の中の（うん／いや）の部分（〔首を〕タテに振る／ヨコに振る）に置き換えたものを調査項目とした。

表2 否定型応答要求表現に対する応答の仕方（首振り）

No.	主説の概念	タテ	ヨコ	両方	首振りなし	無回答
1	肯定	110	7	1	7	2
		86.61%	5.51%	0.79%	5.51%	0.16%
2	否定	9	109	3	6	
		7.09%	85.83%	2.36%	4.72%	
3	否定	66	42	4	15	
		51.95%	33.07%	3.15%	11.81%	
4	肯定	32	63	2	29	1
		25.20%	49.61%	0.16%	22.83%	0.79%
5	否定	85	33	4	5	
		66.93%	25.98%	3.15%	3.94%	
6	肯定	26	84	4	13	
		20.47%	66.14%	3.15%	10.24%	
7	否定	117	5	1	4	
		92.13%	3.94%	0.79%	3.15%	
8	肯定	1	114	1	11	
		0.79%	89.76%	0.79%	8.66%	
9	否定	70	45	6	6	
		55.12%	35.43%	4.72%	4.72%	
10	肯定	24	81	3	18	1
		18.90%	63.78%	2.36%	14.17%	0.79%

首振りについても、「yes / no」の応答とほぼ同様の傾向が見て取れる。すなわち、以下のような結果である。

pattern A : 「タテ＋肯定概念／ヨコ＋否定概念」が多い。

pattern B : 「タテ＋否定概念／ヨコ＋肯定概念」が多い。（ただしばらつきが多い）

pattern C : 「タテ＋否定概念／ヨコ＋肯定概念」が多い。

pattern D : 「タテ＋否定概念／ヨコ＋肯定概念」が多い。（9 はばらつきが多い）

pattern E : 「タテ＋否定概念／ヨコ＋肯定概念」が多い。

しかし、「yes / no」の応答と首振りとを比べた時に、明らかな傾向のちがいが指摘できる。それは首振りの方が英語的応答になっている点である。英語的応答である「yes（タテ）＋肯定概念」「no（ヨコ）＋否定概念」となっているものをピックアップすると以下のような結果になる。

表3 英語的応答から見た yes / no と首振り

	応答詞	首振り
1 (肯定)	yes 88.19%	タテ 86.61%
2 (否定)	no 83.86%	ヨコ 85.83%
3 (否定)	no 4.72%	ヨコ 33.07%
4 (肯定)	yes 35.43%	タテ 25.20%
5 (否定)	no 18.11%	ヨコ 25.98%
6 (肯定)	yes 3.15%	タテ 20.47%
7 (否定)	no 4.72%	ヨコ 3.94%
8 (肯定)	yes 0.79%	タテ 0.79%
9 (否定)	no 20.47%	ヨコ 35.43%
10 (肯定)	yes 7.09%	タテ 18.90%

(10 ポイント以上の差のあるところをマークをした)

表3で、首振りで英語的リアクションが大きく勝っているのが、3, 6, 9, 10であり、yes / no で英語的リアクションが大きく勝っているのが4である。先に見た通り4の「はい」は、添乗員に忘れ物をしている人間がいることについて気付いてほしいという、アピールの意味が強いとすると、これを例外扱いにしてもよいであろう。なぜ、首振りの方が応答詞を用いた表現よりも英語的になるのかは不明である。ただ筆者の体験で、たとえば「その話、まだ皆さんには伝えない方がよいですね」という発言に対して「(首をヨコに振り) 伝えないでください」などと言ったリアクションが帰ってくるケースがあり、違和感を持っていたのだが、データの上でも裏付けられた結果となった。

## V まとめ

以上から次のような結論を導くことができるであろう。

1. ～ナイカ型については、肯定概念への見込み(「傾き」)を認めることができるものの、肯定概念について話してどの程度蓋然性があるとみなしているかについて、応答者の判断に揺れがあり、蓋然性が低いと見積もった場合は、yes + 否定概念、no + 肯定概念という応答パターンとなる。
2. ～ノカ型については、肯定概念への見込み(「傾き」)の他に、それを裏切る状況(＝否定概念)の認識が加わる。アンケート結果を見る限り、状況認識に対する応答が多い。
3. ～ネ型については、問いかける側に否定概念への同意要求が認められるものであり、応答者はそれに応えるものである。
4. ～ヨネ型については、質問者の「肯定概念への期待」「否定概念への懸念」のいずれに対する応答をするかで判断が分かれる。
5. 応答詞の使用と首振りを比べると、首振りの方が英語型の応答の仕方(yes + 肯定概念、no + 否定概念)に対する移行が認められる。

注2 日本語における否定疑問文の肯定概念への「傾き」については、久野暉 1973、仁田義雄 1986、田野村忠温 1991、井上優 1994、鄭相哲 1994、安達太郎 1999、宮崎和人 2004、井島正博 2006、張雅智 2009 など多数ある。また英語に関しては Lyons 1977、太田明 1980 がある。

注3 田野村忠温 1990、参照。

注4 英語型の応答の例としては以下のようなものが考えられる。

(ある日、未解決事件を継続調査する部署(ケイゾク)に旅館の仲居が訪れる。彼女によると、旅館に「泊まると必ず死ぬ部屋」があり、旅館の主人の娘がその部屋に泊まると言い張っており、心配なのでケイゾクの誰かに一緒に泊まってほしいという。そこで、柴田純と真山徹が旅館に派遣された。柴田は泊まる気満々だが、真山は泊まりたくない。)

真山 お前さ、その、泊まると死ぬ部屋って、泊まるつもりじゃないだろ?

柴田 はい! 「泊まる」の意

真山 おれは泊まんねーよ。恐<sup>こ</sup>一から。

ドラマ『ケイゾク』(TBS系)第4話 泊まると必ず死ぬ部屋

このドラマでは柴田は非常識な人間として設定されており、相手の期待を付度するという感覚の欠如がこのような応答表現になっているのかもしれない。

なお山浦玄嗣 2004 によると、岩手県気仙地方においては否定疑問文に対する応答が英語型であるとのことである。また『方言文法全国地図』第4集 表現法編1』の図163、図165を見ると、宮崎県から熊本県付近を中心に他地域とは異なる応答詞の使用が認められる。図163「友達から「今、お前のところに車は無いだろう」と聞かれて、「うん、無いよ」と答えるとき(…)」、他地域の多くがyes系を用いるのに対して、この地域ではno系を用い、図165「(…)友達から「今、お前のところに車は無いだろう?」と聞かれて、「いや、有るよと答えるとき(…)」、他地域の多くがno系を用いるのに対して、この地域ではyes系を用いている。地域の変異についてはより細かな調査が必要であろう。

注5 亀山里津子 2012 によれば、英語でも negative orientation が強い疑問文(例えば “Didn’t you lift a finger to help him?”) の場合、yes + 否定概念、no + 肯定概念になる場合があるという。

注6 恫喝をする人に対して、疑念を払拭しようとする応答の例としては次のようなものが考えられる。

(2000年シドニー五輪、柔道100kg超級銀メダリスト篠原信一の高校時代の再現ドラマが流れる。当時篠原は監督が怖くて常に柔道部をやめようと思っていたが、言い出せずにいた。そんなある日、柔道部の友人が篠原に、退部することを監督に伝えるといい、篠原も友人のあとに続けて辞めると言うという約束をする。友人は約束通り監督に退部を申し出る。ところが、篠原は監督の剣幕に押されて

ひるんでしまう。)

監督(友人に向かって)何(なに)ィ? 辞めるやと!(篠原に向き直り)  
お前も、辞める、言う、ちゃうやろな?!

篠原 いいえ、やります。(=「部活を続けます」)!

(中居正広の金スマ 2015年3月27日放送(フジ系)より)

#### 参考文献

- 安達太郎 1999:『日本語疑問文における判断の諸相』(くろしお出版)
- 井島正博 2006:「否定疑問文の語用論的分析」(『日本語文法の新地平2 文論編』くろしお出版)
- 井上優 1994:「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐる」(国立国語研究所『研究報告集』15、1994.3)
- 久野暉 1973:『日本文法研究』(大修館書店)
- 国立国語研究所『方言文法全国地図 第4集 表現法編1』(1999)
- 亀山里津子 2012:「否定疑問文に対する応答のゆれ」(『英語語法文法研究』19、2012)
- 田野村忠温 1990:『現代日本語の文法I 「のだ」の意味と用法』(和泉書院)
- 田野村忠温 1991:「否定文における肯定と否定」(『国語学』164、1991.3)
- 張雅智 2004:「「ではないか」の用法」(東北大学大学院文学研究科言語科学専攻『言語科学論集』8、2004.12)
- 張雅智 2008:「「～ないか」の用法」(東北大学大学院文学研究科言語科学専攻『言語科学論集』12、2008.12)
- 張雅智 2009:「「～ないか」の確認的な機能—確認要求「～ではないか」との比較を通して」(『文芸研究』168、2009.9)
- 張雅智 2009:現代日本語における疑問文の「傾き」—肯定否定疑問文の機能を通して—(東北大学文学会『文化』72—2・3)
- 張雅智 2011:「「～ではないか」の確認要求と位置づけ」(『国語学研究』50、2011.3)
- 中村幸弘 2005:「否定疑問文と、その応答詞—『鹿の巻筆』『無事志有意』『浮世風呂』『東海道中膝栗毛』のアイ・ハイとイヤ・イゝへなど—」(『国学院大学大学院紀要、文学研究科』37)
- 橋本徹也 1994:「否定疑問文とその応答に関する覚書」(『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』20、1994.3)
- 三宅知宏 1994:「否定疑問文による確認要求的表現について」(大阪大学『現代日本語研究』1、1994.3)
- 宮崎和人 2004:「否定疑問文の類型について」(『岡山大学言語論叢』11、2004.1)
- 宮崎和人 2005:『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』(ひつじ書房)
- 山浦玄嗣 2004:「ケセン語の世界⑧ ウンツェハ」(『日本語学』23—5、2004.4)
- くあげつま ゆうき／本学教授